

「第19回日本臨床環境医学会学術集会」

(臨床環境19:63~64, 2010)

学術集会を終えて

—第19回日本臨床環境医学会学術集会(東京)を終えて—

第19回学術集会会長 坂部 貢

東海大学医学部基礎医学系

平成22年7月2日(金)～3日(土)の2日間に亘って、第19回日本環境医学会学術集会を東京(北里大学白金キャンパス)にて開催させていただきました。本学術集会開催に際して、日本衛生学会の共催、市民公開特別シンポジウムについては、一般社団法人日本サステナブル建築協会のご後援をいただきました。平成23年に学会創立20周年を迎えるにあたって、「活発で実りのある学術集会となりますように」と願って、スタッフ一団となって運営に努めました。

今回の学術集会のテーマは、“患者から環境が見える”にしました。本学会はこれまでに、さまざまな環境因子に起因する健康障害を扱ってきましたが、「患者」様からのメッセージを理解することで、身の回りの「環境」がよく分かるということをあらためてメッセージし、環境影響について活発に論じてみたいと思ったからです。当初の期待通り、参加者の皆さんから活発な議論をいただくことができました。

プログラムを振り返りますと、特別講演は、「臨床環境医学会-過去・現在、そして未来に期待するものは？」と題して、本学会の初代理事長で、北里大学名誉教授・石川 哲先生にお願いいたしました。有機リン毒性に関する石川先生のライフワークとも言うべき貴重なデータを提示していただき、20周年に向けた本学会の正しい方向性についてもご教授いただきました。

また今回は、2つのシンポジウムを組ませてもらいました。シンポジウム1は「胎児・小児発達期の化学物質曝露が成長後の健康に与える影響」

がテーマでした。子どもの健康に影響を与える環境リスクを明らかにしようとするエコチル調査(子どもの健康と環境に関する全国調査)を受けて企画しましたが、その方面で指導的立場におられる自治医科大学の香山不二雄先生にコーディネーターをお願いしました。環境因子と子どもの発達に関する最先端の研究動向が報告されました。またシンポジウム2では「フッ化物と健康」がテーマ、佐藤 勉先生(日本歯科大学)にコーディネーターをお願いし、水道水や歯磨き剤のフッ化物が我々の健康にどのような影響を及ぼすのか、歯科領域の環境因子に焦点を当てて論じていただきました。これまで歯科領域が手薄だった本学術集会でしたので、大変新鮮味のあるシンポジウムになったのではないかと自負しています。今後の学術集会でも、歯科領域のシンポジウムを継続して頂きたいと思います。

さらに「睡眠と子どもの健康」と題したランチョンセミナーも企画いたしました。小児期の睡眠障害が学習障害などの深く関わっているとする、本学会重鎮の瀬川昌也先生(瀬川小児神経学クリニック)に講演をお願いしました。瀬川先生の詳細なデータに「宝石のような価値」を見出すことができました。

1日目夕方からの懇親会は、当初の予想70名をはるかに超え、100名近いご参加をいただきました。会場がかなり狭い感じになってしまいましたが、大変盛り上がりました。何といても皆さん驚かれたのは、私のボケ漫才だったのではないのでしょうか??

100%「どん引き」されることを期待してやりましたが、妙に受けたところがあって、予想外でした。次回の学術集会での、森千里大会長の「かくし芸」を皆さん期待いたしましょう。

2日目最後の締めくくりは、市民公開特別シンポジウムでした。「居住環境と知的生産性」をテーマとし、村上周三先生（建築研究所）と田辺新一先生（早稲田大学）にコーディネーターをお願いしました。効率的な知的生産性を上げる居住環境

とはどういうものかについて、大変興味ある報告が行われ、活発な質疑もみられました。

一般演題も例年を上回る47題（口頭発表34題、ポスター13題）のご応募がありました。詳細は本号・抄録集をご覧くださいと思います。

最後に、本学術集会が、会員の皆様ならびに関連研究者の交流をさらに深め、環境医学の発展に少しでも寄与できる機会となりましたことを心から感謝いたします。